



京田辺市長賞

瓦（日本画）／澤田正一（京田辺市）

新しい住宅地に家が建ち、街並みは変わっても旧家の敷地には立派な蔵が今でも多く残っています。風雪、豪雨、台風、火災に備え、幾年もの年月に耐えた重厚な蔵の壁と蔵の瓦に時の流れと重みを感じ、制作しました。



京田辺市教育委員会賞

真夏のプレゼント（油画）

／岡田良子（城陽市）

舞い降りてくる雪を全身に浴びてはしゃぐ子どもたち・・・ゴーグルとマスクを付けて冷たい雪の感触を体験しました。コロナで丸2年、当たり前の日常が無くなり、子供たちには我慢、我慢の毎日でした。そんな中でもそれぞれの団体や地域では工夫を凝らし、子供たちの楽しみを作ってきました。この絵はそんな楽しみを描いてみました。



京田辺芸術家協会賞

いい日（油画）／Ken San（京田辺市）

コロナ禍で、1年半振りに "いい日" になりました。

京田辺市文化協会賞

母の記憶（日本画）／近江慎子（京田辺市）

母のアルバムにあった一枚の古い写真。今から約60年前の大坂の街に20代の母が居ました。この日この時に母が感じていた街の空気・音、モノクロの写真の中に色々なものを想いめぐらせながら制作しました。





U18審査員賞

トラン（油画）／阪本陽菜（宇治市）

猫の毛並みや顔の立体感を意識し、思わず触りたくなるような質感に仕上げました。



U18審査員賞

角の静物（油画）／竹林知宏（京田辺市）

部屋の片隅にいるモチーフたちを描きました。画面全体の色の響きあいを常に意識して制作しました。

講評

コロナ感染状態の世界が、高校生の作品に現れているのか、例年よりも重苦しい作品が多く見られた。

阪本陽菜さんの「トラン」は、作者が日常かわいがっている猫だろうか。しっかりと対象を見据えた作品となっていた。また、竹林知宏君の作品「角の静物」も作者が日常に触れる身の回りの品々を丹念に描いたものである。

市長賞の澤田正一さんの「瓦」は、重厚な蔵の屋根と壁をデフォルメすることで、時の流れを感じさせてくれる作品となった。時を過ごしてきた者の愛着が画面に伝わる。

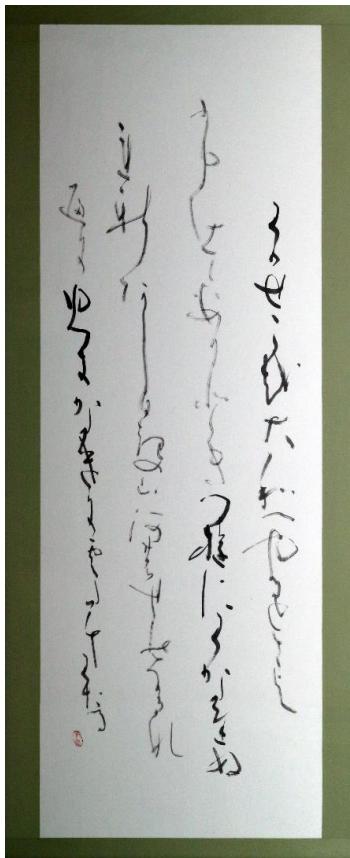
教育委員会賞の岡田良子さんの「真夏のプレゼント」は、夏服を着る子供たちに冬の雪を降らす作者の思いが込められた作品となった。

芸術家協会賞のKen Sanの「いい日」は、コロナ禍の中で、久しぶりにぎわった街の人々の流れるにぎわいを描いた作品である。筆づかいはもう少しだが、構図どりなどはうまかった。

文化協会賞の近江慎子さん「母の記憶」は、母の若き頃の60年前の大坂の街にたたずむ母を描いている。モノクロ写真からイメージされた淡い色彩の母を描きだしている。

コロナ禍の中、若い人たちは思い出の中には逃げ込まれず、現実と直面せざるをえず、作品が暗くなつたのであろう。また、大人たちは楽しかった日々を思い出すといった作品が目立った。肯定しなければ新しい世界は来ないし見えないだろう。

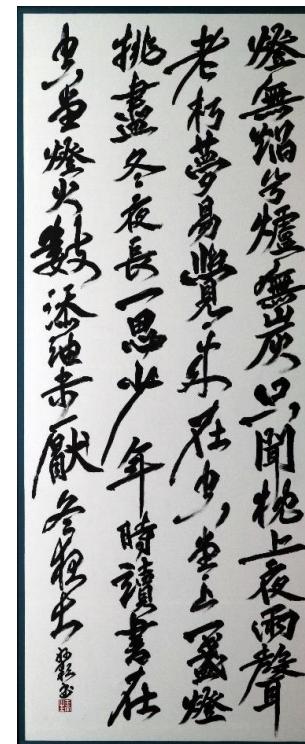
審査員 尾崎眞人



京田辺市長賞

大和／玉井玉窗（京田辺市）

文字の流れや墨の濃淡で奥行きや広がりを感じる様に制作しました。



京田辺市教育委員会賞

冬夜長／宮垣妙彩（京田辺市）

黄庭堅を基盤とし、立体感と流れのある作品に仕上がるよう努めました。全体的にまだまだ未熟さを感じていますが、制作過程において学び得た部分を取り込むことで大いに成長できると改めて実感した今作です。慎重になりがちなところに思い切りも加えて制作しました。

講評

書は書き手の人柄が出るものではありますが、時代の空気や世の中のムードにも影響を受けるものだと言えます。

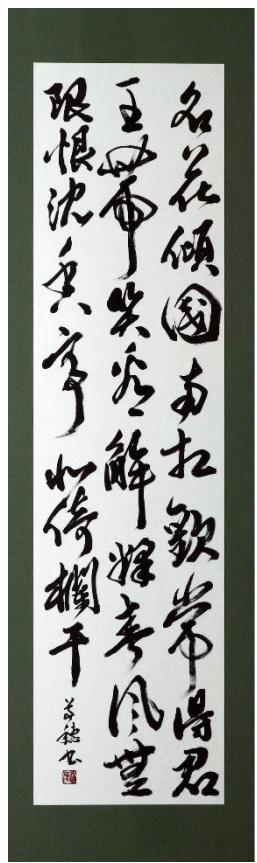
しかし、どんな世情でも自己の楽しみと精神の安定のために筆をとる人々も多く、その意味において、書は書き手を勇気づけるものだと思います。

今回も少なめの応募でしたが安定した力を持たれている方々の力作が集まりました。

上位入賞の方々は、まずなんと言っても書線に練度があり、造形に無理がありません。余白のとり方や墨量の加減なども立派で、まとまりがあります。

筆で文字を書くには、まず技術の高低が問われますが、最終的には作品に対する気持ちが最も大切になるので、今後もさらに前向きに取り組んで下さることを願います。

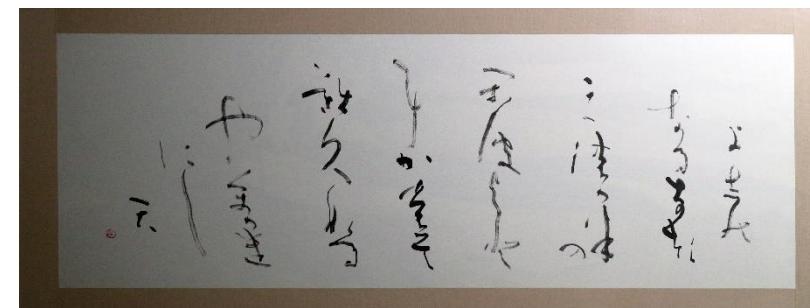
審査員 日比野博鳳



京田辺芸術家協会賞

李白詩／玉出草穂（京田辺市）

書を習い始めて約40年。これまで習得した技法を初心に戻り、活かし書きました。特に、字の大きさのバランスを工夫し、制作致しました。



京田辺市文化協会賞

夏実の河／竹多恵（京田辺市）

空間の美、墨色の変化に気を配り、見ていただく方に万葉の世界を感じていただけるよう書きました。

講評

大変な災禍も一旦収まりつつあります。なかなか文化芸術に目を向ける時間が少ない中、この市展が開催されるとお聞きした時、大変嬉しく思いました。又、出品された意欲的な作品を楽しみに拝見しました。熱のこもった労作ばかりであり、京田辺市の文化の高さを感じました。

「教育委員会賞」の『冬夜長』は凜とした線と黃山谷に倣った造形でとても強い印象を受けました。特に用筆の確かな動きや余白の配置も周到であり感心しました。

又、「芸術家協会賞」の『李白詩』は行の流れも美しく確かな草体の滑らかさの中に強さを包んでおり、すばらしい秀作でした。

様々な表現の作品が集まり開催される本展は毎年拝見するのが楽しみであり、次回は一点でも多くの作品でより高い書の魅力を示していただきたいと期待しております。

審査員 尾西正成



京田辺市長賞

収穫を終えて（木津川市）
／木下八千代（木津川市）

時々ウォーキングする加茂の山間である。ワラ焼きの田んぼのあぜ道にひとりの年配男性が座っていた。「こんにちは」と挨拶をした。「こんにちは、こうしてのんびりするのもいいもんですよ」という言葉をもらった。「美しい光景ですね。写真を撮らせて下さい」とお願いした。ゆっくりと立ち上がって「どうぞ」と言ってくれた。その瞬間をスマホで撮りました。



京田辺市教育委員会賞

朝日に光る樹氷（宇治田原町）
／村山征義（京田辺市）

寒い早朝、霜の茶畑を撮りに行った時に『樹氷』と出合う。やわらかな光も入り最高のシャッターチャンスになった作品です。



京田辺芸術家協会賞

岸辺と桜のシンフォニー（京田辺市）
／吉村はるみ（京田辺市）

木津川の河川敷に佇む一本桜は野性味のある桜ですが、満開の頃をむかえると朝の光を受けて岸辺の風景と一体となって、その姿を現します。その光景に心奪われ作品にしたいと撮影しました。



京田辺市文化協会賞

薰風渡る（宇治田原町）／向平尚武（京田辺市）

5月連休の頃、雨上がりの茶畑をのぞいてみると、雨を吸ってお茶の新芽が伸びておらず、畑の先に見える山には霧がかかって幻想的な雰囲気を醸し出していた。

講評

上位四点以外に審査員を悩ませる作品2点が有り、迷いに迷った結果となりました。
市長賞の作品は煙の色、人物の位置、表現全体の構図等申し分ありません。

「朝日に光る樹氷」は早朝の晩秋を表現してベテランらしい作品ですが、タイトルに一考を要します。
木津川の一本桜は地元ならではの傑作で、茶畑の写真は常連ならではの作品です。
回を重ねる毎に佳作が増えて来ることは大変喜ばしい事だと思います。

審査員 山本一